

インタープリテーションはブリコラージュである

古瀬浩史（帝京科学大学／日本インタープリテーション協会）

キーワード：インタープリテーション、ブリコラージュ、レヴィ・ストロース、野生の思考

「ブリコラージュ」とは「器用仕事」あるいは「ありもの使い」などと訳されるフランス語で、ありあわせのものを使って自分の手でものををつくることを意味する。神話や親族構造の研究で知られるフランスの民俗学者・人類学者、レヴィ・ストロース（1908～2009）は著書『野生の思考』の中で、先住民にみられる神話的思考の説明にこの比喩を用いた。

ブリコラージュという言葉にはとても魅力があるようで、アートやサブカルチャーなどの幅広い分野で、必ずしもレヴィ・ストロースの論述とは関係ない文脈でもしばしば使われている。筆者は、近年になって、この言葉が自然公園等における教育的なコミュニケーションである「インタープリテーション」の特徴を説明するときの比喩としてきわめて的確なのではないかと思うようになった。それは、レヴィ・ストロースが用いた視点とほぼ同じ意味においてであり、本論の表題のように「インタープリテーションはブリコラージュである」と考えている。

ここでは、まずレヴィ・ストロースが、どのような意味においてブリコラージュという比喩を使ったのかについて簡単に紹介し、インタープリテーションがブリコラージュであると考えられる理由を、レヴィ・ストロースの著述からも引用しながら挙げてみたい。

レヴィ・ストロースは、「未開社会」でのフィールドワークを通じて、先住民は現代の科学に劣らない感性と知性を持っていることを数々の例をもって示した。そして、それらの思考は新石器時代から現代まで続く人間の普遍的な思考であるとし、それを「具体の科学」あるいは「野生の思考」と呼んだ。「野生の思考」は、近代科学に至る前の未熟な、非科学的な思考ではなく、広い意味での科学的思考であり、現代にも生き続けていると考えたのである。

ブリコラージュの比喩は、西洋の近代科学を象徴する「エンジニア」の比喩に対比して使われる。「エンジニア」はものを作るのに「仕事の一つ一つについてその計画に即して考案され購入された材料や器具」を用いる（設計図に沿って部品を用意して作成する）。それに対し、「ブリコルール（ブリコラージュを行う人）」は、そのときに持ち合わせている限られた道具と材料の集合で何とかする。これは、近代科学が仮説や理論などの「概念」を用いるのに対し、「野生の思考」では「記号」を用いるというようにも言い換えられている。「記号」とは、その時どきにある具体的な事物、出来事（の断片）やそれらのイメージと理解される。

これらの「野生の思考」と近代の科学の対比についての解説は、ほとんどそのままインタープリテーションと一般的な教育の対比に読み替えることができることに気づく。その観点は一つではなく、いくつかのレイヤーにまたがっているが、最も大きなポイントと思えるのは、インタープリテーション

が「場の資源」に基づいた教育的コミュニケーションであることであろう。以下にいくつかの文章をレヴィ・ストロースの著述から引用してみる。

「神話的思考の諸要素はつねに知覚と概念との中間に位置する。知覚内容をその生じた具体的状況から抜き出すことは不可能であり、また他方、概念にたよるためには、一時的にせよ思考がその計画を「括弧に入れ」うる必要がある。」（『野生の思考』P23）

計画ができると彼（ブリコルール）ははりきるが、そこで彼がまずやることは後ろ向き（レヴィ）の行為である。いままでに集めてもっている道具と材料の全体をふりかえてみて、何かあるかをすべて調べ上げ、もしくは調べなおさなければならない。そのつぎには、とりわけ大切なことなのだが、道具材料と一種の対話を交わし、いま与えられている問題に対してこれらの資材が出しうる可能な回答をすべて出してみる。しかるのちその中から採用すべきものを選ぶのである。彼の「宝庫」を構成する雑多なものすべてに尋ねて、それぞれが何の「記号」となりうるかを確かむ。その作業は作り上げるべき集合を定義するのに役立つ。（『野生の思考』P24）

「ブリコルールは、前述のように、ものと『語る』だけでなく、ものを使って『語る』。限られた可能性の中で選択を行うことによって、作者の性格と人生を語るのである。」（『野生の思考』P27）

神話的思考はブリコルールであって、出来事、いやむしろ出来事の断片を組み合わせて構造を作り上げるが、科学は、創始されたという事実だけで動き出し、自ら絶えまなく製造している構造、すなわち仮説と理論をつかって、出来事という形で自らの手段や成果を作り出していく。（中略）この2つの手続はどちらも有効・・・」（『野生の思考』P28）

「科学がその誕生に際して科学性として要求した性質は体験には属さず、あらゆる出来事の外にそれとは無関係なもののように存在する性質であった。それが一次性質という観念の意味である。」（『野生の思考』P28）

科学とブリコラージュでは構造と出来事の関係が逆対象的（レヴィ）にあらわれる。（『野生の思考』P32）

学校教育に代表される公的な教育にはカリキュラムがあり、それに則して教材が用意される。これはまさにエンジニア的である。しかし、インタープリテーションでは共通のカリキュラムは存在しておらず、常に現場（自然公園やミュージアム）にあるモノやコト、そして参加者がその場で体験することがプログラムの基盤をなしている。ガイドウォーク

(Guided Walk) という典型的なインタープリテーションの方法を考えて見るとわかりやすい。インタープリターがガイドプランを立てるためにまず行うのはフィールドでの調査である。フィールドにどのような資源(生物や地形や出来事)があるか、自然の断片を拾い集め、それらを使ってストーリーや参加者の学習体験をデザインする。さらに、プログラム当日は、下見のときは素材が大きく変化しているかもしれないし、参加者が感じることは計画時の想定や、参加者によって違っているかもしれない。インタープリターに求められるのはブリコロールとしての臨機応変さである。そして、プログラムを通じて到達するところは、計画からずれる可能性を常に持っている。一方で、概念の習得を目的として計画をスタートしてそれに合わせて用意された教材を使って学ぶよりも、ずっと具体的で、いきいきとしたイメージを学習者に残すことが可能である。

インタープリテーションの説明で、しばしば、「さわれるもの(tangible/有形)を通じて、さわれないこと(intangible/無形)、すなわち意味や関係性にアプローチする」という言い方がなされる。このようなインタープリテーションの特徴は、ここまでで紹介したブリコラージュという比喻を用いた神話的思考の説明と寸分違わず合致しているようにさえ思える。

インタープリテーションという活動だけでなく、インタープリターという役割もまたブリコロール的である。インタープリターは、自然や環境を理解する上で必要な動植物や生態学的な概念に関する知識を持っていることも重要であるが、それ以上に求められるのは、その場の価値や一見では気づかない事象(例えば動物の痕跡のような)を見つけ出し、重要性や不思議さを自らの感性で感じ取って、それをプログラムに活かすことであろう。インタープリテーションでは、インタープリター自身の過去の自然体験や、旅の体験、文学や音楽などのアートの体験もプログラムに反映されることが普通である。

日本におけるインタープリタートレーニングのプログラムでも、インタープリテーションのブリコラージュ的な特徴にフォーカスを当てた実習がみられる。日本インタープリテーション協会が主催する「インタープリター・トレーニング・セミナー」では、研修会後半におこなわれるプログラムデザインの実習の中で、インタープリテーションプログラムづくりの過程を、「素材探し」→「素材の扱いの検討」→「プログラムデザイン」というように組み立てており、概念や手法から考えるのではなく、フィールドの資源を調査することからプログラムづくりをスタートすることを基本としている。(実際の現場のプログラムデザインでは概念から出発することもある)。このような研修会のプロセスは、多分にブリコラージュの要素が組み込まれている結果であると理解することができる。

近代の科学と神話的思考(野生の思考)は逆対象的でありながら、どちらも有効であるとレヴィ・ストロースが言うように、概念に基づいた一般的な教育と、資源(事物)に基づいたアプローチであるインタープリテーションはある部分では逆対象的であり、また相互補完的なものなのかもしれない。

い。

レヴィ・ストロースの論述には、植民地化によって先住民の文化を破壊し、否定してきた西洋の歴史観に対する強い批判がある。ブリコラージュの比喻が多くの人にとって魅力的に感じられるのは、西洋的な文明が様々な形で行き詰まっているように感じられる今日の中で、人間に普遍的に存在している知である「野生の思考」への直感的な期待のようにも思える。近代的な科学(レヴィ・ストロースはそれを「栽培された思考」と呼んだ)が高度に進展しても、その結果として社会の持続可能性が実現する気配は一向に見えてこない。

教育において「野生の思考」的なアプローチであるインタープリテーションがどのような意義を持つのかは、さらに深い考察をする必要があるが、1つのポイントとして挙げられるのは、「野生の思考」が持っている全体的把握を目指す傾向だと考える。

「その人たちは自分の周囲の世界とその本性、それに自分たちの社会を理解する必要。理解したいという欲求によって動いている」
(『神話と意味』P22)

例えば、半日程度の時間をかけて自然観察をしたとして、科学的な思考において導かれる結論はほとんどないか僅かであろう(知識として持っている概念を補強したり、科学的な考え方について学ぶことはできる)。しかし、人は常にものごとを全体的に理解したいという傾向を持っており、かつそれは知識や概念的な理解だけでなく、五官を通じて知覚されるイメージを通じて試みられている。インタープリテーションは、国立公園やミュージアム等の場において、来訪者が世界の全体的な把握を目指そうとする試みを支えようとしているのではないだろうか。

インタープリテーションをブリコラージュになぞってみる時、これからの社会におけるインタープリテーションの役割を考える上での大きなヒントがあるように感じずにはいられない。

参考文献

- 1) レヴィ・ストロース, 1976, 野生の思考(大橋保夫 訳), 株式会社みすず書房, 東京
- 2) レヴィ・ストロース, 1979, 構造・神話・労働(大橋保夫 編), 株式会社みすず書房, 東京
- 3) レヴィ・ストロース, 1996, 神話と意味(大橋保夫 訳), 株式会社みすず書房, 東京
- 4) 小田 亮, 2000, レヴィ=ストロース入門, ちくま新書, 東京